

## Topics

### アートによる空き家活用の可能性を提示

### アーツカウンシルしずおかがガイドライン作成で報告会開催

先月17日、アーツカウンシルしずおかが、県内の空き家活用に新たな可能性を示す取組の総括の場として、「アートによる空き家活用『fresh air』ガイドライン完成報告会」を開きました。



アーツカウンシルは「fresh air」事業と銘打ち、従来の不動産市場では活用が難しい空き家に対し、アートの視点を導入することで新たな価値創出を目指す調査研究を3年間にわたり実施。まちづくり分野と連携しながら、県内4地域でアートプロジェクトを展開しました。

このうち、東伊豆町稲取地区では、アーティストと協働し、文化施設としての古民家再生を行ったほか、熱海市や御殿場市などでは、空き家とアーティストを結びつける「空き家ツアー」などの試みも行ったといいます。

こうした実践や有識者による議論を踏まえ、アーツカウンシルでは、「アートではじめる空き家活用ガイドライン」を策定。

ガイドラインは、行政やまちづくり団体、アーティストなど多様な主体がそれぞれの役割を認識し、連携しながら空き家活用を進めるための指針として位置付けられました。

報告会では、不動産業の視点から見たアートの効果について、「fresh air」ワーキンググループの座長で、長泉町などでリノベーションまちづくりに取り組む日の出企画の山田知弘氏が講演。

「不動産仲介業者やリノベーションまちづくりで扱いにくい空き物件であっても、アーティストは独自の発想で価値を見出す」と指摘（天井が抜けた空間を「庭」と捉えたり、残置物を作品の一部として活用したりなど）。「従来の常識にとられない視点が空き家の可能性を広げる」としました。

また、「空き家所有者の心理的ハードルを下げる効果がある」とした上で、長泉町で、当初は活用に消極的だった物件が、アート展示を契機に開放され、その後コワーキングスペースや店舗の出店につながった事例も紹介。「営利目的の貸出しに抵抗を示す家主でも、アート展示であれば受け入れやすく、1日だけといった短期利用から関係性を築くことができる」としました。

続いて行われたクロストークには、山田氏と、現代美術作家としての作品制作の傍ら、熱海市でリノベーションまちづくりに取り組むatamistaの戸井田雄氏、アーツカウンシル職員の立石沙織が3人登壇。

山田氏からは『不動産事業者』の目線、戸井田氏からは『アーティスト』の目線で話が展開され、「建物の使い方や原状回復の考え方には差があることから、その間を取り持つ中間支援的な役割、いわゆる『家守』の存在が不可欠」と指摘。アーティストの自由な発想を尊重しつつ、所有者の意向とのバランスを取る必要性が共有されました。

さらに、アートは個別の空き家活用にとどまらず、エリア全体の魅力向上にも寄与する点が強調され、「空き家を活用した展示やイベントは人を呼び込みやすく、まちづくりの側がそれをビジネスや定住へとつなげることで、持続的な地域活性化が期待される。古民家などが持つ歴史や物語性を活かすことも、物件価値の向上に資する重要な要素」とまとめました。

アーツカウンシルしずおか・立石沙織氏

「空き家とアーティストの関わりを通じ、潜在的な価値の掘り起こしや新たな関係性の創出が確認されました。本ガイドラインを契機に知見の共有を進めていきますので、関心をもっていただけた方はぜひアーツカウンシルしずおかに御連絡ください。各地での実践に向けて、連携を広げていけたら幸いです。」

ガイドラインはこちらのQRコードから見ることができます。

